

素直な容疑者 原田康子



す なお よう ぎ しや
素直な容疑者

はら だ やす こ
原田康子

© Yasuko Harada 1984

昭和59年5月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京8-3930

Printed in Japan



講談社文庫

定価320円

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——東洋印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えます。(庫一)

ISBN4-06-183047-3 (0)



講談社文庫

素直な容疑者

原田康子

目次

素直な容疑者

空巢専門

朝までの五時間

峠

窓辺の娘

犬を飼う男

街の神秘と憂愁

解説

高城 高
三六

二八

一五

一七

二三

七

五

七

素直な容疑者

素直な容疑者

その日の朝の寝ざめは、それほど悪いものではなかった。やさしく充ちたりていて、そのくせなにかもの悲しく、やるせない気分だった。女の横で朝をむかえるのは、なにしろはじめての経験だった。

明は夢うつつに小鳥の声を聞いていた。十月ののどかな朝の、やわらかな日射しとたわむれている鳴き声のようだった。それが隣の部屋で鳴いている小鳥の声であり、小鳥はローラー・カナリアだとはつきり気づいた瞬間、明はびくっとした。頬に冷たいものがひやりとあたっていた。明はこわごわ女の肩に手をのばした。肩も乳房とおなじように冷たかった。氷の冷たさともまたちがう、死んだ人間の冷たさだった。背すじにつうつと悪寒が走って、明ははね起きた。女は目をとじてなにか口をあけ、片ほうの手を投げ出していた。シーツが赤くよごれ、ベッドの脇に真赤な四角なものがひかっていた。それがなにか、明はろくに見もしなかった。彼はやにわに女の

からだに上体を投げかけていた。

「奥さん、奥さん、奥さん……」

明が女の肩をゆすぶると、女の頭はかすかにゆれた。こわれた人形のようなぎこちなさだった。明は女の頭を両手でしっかりと握り、女の口にくちびるを押しつけた。しかし、女のくちびるは固くて冷たく、なんの反応も示さなかった。明はふたたび女をゆすぶり、頬を顔に伏せた。もう声は出なかった。熱したするどいナイフで、心臓を縦横に切りきざまれているようだった。

明はようやく上体を起こした。女の歯と歯のあいだの細いすき間に、こわばった舌の先がのぞいていた。毛布の衿えりもよこれていた。

ベッドの横の四角な赤いものは、真赤な水をたたえた水槽だった。女は手首を切ったらしい。片ほうの腕を水につけて死んでいた。水は手首の上まであつたが、ひじまでとどいてはいなかった。ひじと手首のちようどなかばあたりまで水につかっていた。そして血で染まった水面に、赤んぼうの小指大のものがぶかぶか浮かんでいた。熱帯魚の死骸だった。熱帯魚は白い腹を見せ、そのひとつは女の腕の内がわにはりついていた。

明はベッドから飛び降りると、パジャマのままドアのそばまでとんで行った。隣の部屋へ通じるドアだ。しかし、鍵がかかっていた。明はドアをたたき、それからそのドアは、鍵をつかなくてもなかからあけることができるシリンドー錠錠がつけられていることに気づいた。

隣は居間らしかった。ノックの音を聞いたのか、明がドアをあけると、女中らしいエプロン姿

の娘が、部屋の真中に突っ立っていた。明を見ると、娘の目がまんまるになった。満月よりもま
るくなった。娘は二、三步あとずさりすると、するどい悲鳴をあげながら廊下のほうへ駆け出し
て行った。明は娘のことなど気にしてはいられなかった。

彼はこの部屋にあるかもしれない電話機をさがした。それは一方の壁ぎわの、サイドボードの
上にあつた。明は受話器をとると、ふるえる指で一一〇番へダイヤルをした。齒もひざ頭もふる
えていた。

明が受話器を置いたとき、みだれた足音が階段に聞こえて、ピンクのかたまりが部屋にとびこ
んで来た。ピンクのパジャマを着たまだ若い娘だった。娘は明に目もくれずに、女の寝室に駆け
こんで行った。ピンクの疾風がかすめていったようだった。

娘のあとから、女中らしいさっきの娘がもどって来た。女中は寝室にはいらなかった。戸口に
おすおす立って寝室をのぞきこむと、大きく息を吸いこんだ。明は女中の横をすりぬけて寝室に
もどった。ピンクのパジャマの娘が、ベッドにさがりこんで女に抱きついていて、娘は女におお
いかぶさり、両手でしっかり女の頭をはさんでいた。娘の細い指のあいだで女の黒い髪がゆれう
ごいていた。娘は髪を強く引っつかんでいるようだった。喉から意味のとれない言葉がもれてい
た。しゃっくりのようだった。

警官が到着するまで、明はぼんやり娘と女を見おろしていた。明はまだ女の死を信じられな
かった。夢でも見ているようだった。カーテンをおろしたままの寝室はほの暗く、娘のパジャマ
のピンクも、シーツと水槽の血の色も、夢のなかの色彩のようにはやけて見えた。明は娘を女か

ら引きはなして、もう一度女の頬にさわってみたかったが、そんな真似はできなかった。娘が何者なのか、明は知らなかった。こんな娘がこの家にいたことさえ、彼はいまのいままで知らなかったのである。まもなくパトカーのサイレンの音が聞こえて玄関のブザーが鳴り、制服の警官が数人寝室にはいつて来た。警官の一人が娘を死体から引きはなそうとすると、娘はますます強く女にしがみついた。警官は二人がかりで娘をベッドからおろし、両脇から娘を抱えるようにして居間のほうへつれて行った。いつ来たのか、私服の刑事も二、三人、ベッドの近くに立っていた。明が彼等に気づいたとき、彼等の視線は全部明にそそがれていた。

「あんたが見つけたんだね」とそのなかの一人が聞いた。

「ええ」と明はうなずいた。

「このうちの者じゃないな」

「ええ」

「いつ来たんだ？」

「ゆうべです。ゆうべおそくです」

「名前は？」

「庄司です。庄司明……」

「いくつだ？」

「十九です」

「学生か？」

「ちがいます。浪人です」

刑事は明の住所をたずね、女との関係をたずねた。明は観念するはかなかった。

「僕はゆうべ、この近くで奥さんに会ったんです。奥さんにつれて来られたんです」

「ゆうべがはじめてかね？」

「ええ」

「前からの知合いじゃないのかね？」

「ええ」

「ふむ」

刑事はまだじろじろ明を見まわしていた。無遠慮に全身くまなく目でさぐっていた。刑事が戸口のほうを見てあごをしゃくると、青白いひかりがぱつとひらめいた。フラッシュの閃光だった。白の上つぱりを羽おった鑑識の男が、明にカメラをむけていた。

明はさすがにびっくりした。相手の刑事は明の背を押して三面鏡の前までつれて行くと、ハンカチをつかつて注意深く鏡をひらいた。右半面が赤くよごれた彼の顔が鏡にうつった。血は、パジャマの衿と肩口もよごしていた。明は棒立ちになった。それから目まいがした。足もとから力がぬけていって、目がかすみかけた。

刑事が明の背をささえた。

「まあ、いいさ。そのへんで休んでもらおう。顔を洗って、着がえたほうがいいな。その恰好じゃ寒いだろうし、気分も悪いだろう」

べつの刑事が、明のズボンやセーターやスポーツシャツを投げて寄こした。明は刑事たちを見守られながらパジャマをぬいだ。それは白地に紺とグレーの縞しまがはいった、ありふれた男物のパジャマだった。もちろん、明のパジャマではない。女が着せてくれたのだった。洗濯はしてあったが新品ではなく、とくに大きくはなかったが、ほっそりした明にはだぶだぶだった。刑事の立合いで顔を洗うと、明はしばらく居間で待たせられた。どこへ行ったのか、女中もピンクのパジャマの娘も見えなかった。明はいすのひとつに腰をおろして、目の前を行き来する男たちをぼうつとながめていた。影法師を見ているようだった。カナリアは鳴いてはいなかった。カナリアもおどろいたのかもしれない。カナリアの声を耳にしたのは、はるか昔の朝のようだった。

やがてさっきの刑事がもどって来た。

「ちよっと署のほうへ来てもらうよ。時間はとらせない」

明は素直だった。二人の刑事にはさまれて玄関を出た。彼は死んだ女のそばで目をさましたのだった。警察で事情を調べられても仕方がないと思っていた。殺人の疑いをかけられているなどとは、彼は夢にも思わなかった。

2

明がつれて行かれたところは、札幌中央署の取調べ室だった。窓のなかには秋の午後の空がひかっていたが、その部屋はあかるくもなく、小ざれいともいえなかった。固い椅子と粗末な机が

あって、係官たちがふかすたはこのけむりが立ちこめていた。三階の部屋で、窓の下を行き来する自動車の騒音がときどき耳についた。中央署はビル街の真中にあるのだった。

明を調べたのは、井坂という中年の警部補だった。冷静な目と引きしまったあごとを持った痩せぎすの男だった。ほかに刑事が何人かいて、刑事も警部補もときどき席をはずしたが、明一人を部屋にのこして行くことはなかった。明はすっかりくたびれていた。おなじことを何度もしやべらせられて、こめかみがずきずきしだしていた。

「君はたしかに、朝までなにも知らなかったのかね？」と井坂警部補が聞きなおした。「悲鳴もなにも聞かなかったのか？」

「聞きません」

「ほかの二人が知らないと言うのはわかる。女中は廊下ひとつへだてた部屋に寝てたんだし、従妹のほうは二階に寝てたんだ。しかし、君はいっしょに寝てたんだぜ。おまけに返り血まであびてる。君がぜんぜん知らなかったなぞとは、とうてい信じられんね」

「でも、知らなかったんです。僕はなんにも知らないんです。朝までぐっすり眠ってたんです」「へとへとになってかね？」

明はぱつと顔を赤らめると、くちびるを引きむすんで言った。

「僕はそれに睡眠薬を飲んでたんです」

「寝るまえにかね？」

明は目を伏せた。井坂はだまって明を見ていた。明は小声で答えた。